東欧経済史

I. T. ベレンド
G. ラーンキ　共著
南塚信吾　監訳

中央大学出版部

東欧経済史

1978年5月20日　印刷
1978年5月30日　発行

定価 3,500円

〈検印廃止〉

監訳者　南　塚　信　吾
発行者　佐　野　幸　作

発行所　中央大学出版部
八王子市東中野742番地1
郵便番号 192-03
電話0426(74)2351・振替東京8154番

©1978　南塚信吾

印刷・大永舎／製本・菊川製本

3033-040151-4632

本訳書を

故熊谷一男教授に捧ぐ

日本語版への序言

われわれの本は、ハンガリー語版で二版、英語版で二版が出たあと、イタリア語版とほとんど同時に、日本の読者の皆さんにも紹介されることとなった。このような可能性が与えられたことに、われわれはとくに喜びを感じるものである。

親愛なる日本の読者の皆さん、歴史学者、経済学者の皆さん、そしてより広い世界と現代史に至る道とに関心をお持ちのすべての読者の皆さんが、東欧の過去についてのより包括的なイメージを本書からくみとってくださり、さらには、多分、現在を理解するためのより妥当な背景を把握してくださることを望むものである。

もし、われわれの扱った地域の研究に努力を重ねておられるわれわれの同僚の皆さんおよび非常に優れた大学院生の皆さんはもとより、ひょっとして日本の経済史研究者の皆さんも、われわれの本を利用してくださることができるならば、それはわれわれにとってこの上もない喜びである。

だが、われわれの本の日本語版に関連して、それ以上のことが問題になるように思われる。つまり、われわれの比較研究の拡大と個人的経験とを基礎にするかぎりにおいて、東欧の経済発展と日本の経済発展との比較研究が、その大きな地理的距離にもかかわらず、特別の学問的重要性と有用性とを持ちうるのではないかという確信が、われわれの内に、しだいに強くなってきているのである。意外な類似性と著しい相違性とが、このような仕事の遂行を不可欠のものにしているように思われる。これなしには、ヨーロッパの発展は正しく理解できず、とりわけ、ヨ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ーロッパの中の一九世紀の中頃にはまだ後進的であったと見なされる地域の経済史は、正しく理解できないであろう。また、日本の発展も、アメリカや西欧との比較の試みがすでに行なわれたあとで、より似かよった東欧との比較が行なわれるならば、それは新しい観点から解明されるであろうと思われるのである。だが、これはすべて将来の――しかし、あまり遠からぬ将来であることを祈るものではあるが――課題である。

しかしながら、われわれは、地域的な比較研究としては国際的に最初の試みであったわれわれの本の日本語版が出ること自体が、この課題の基礎の設定に、わずかではあれ貢献しうるのではないかと考えるしだいである。

最後に、われわれは、この本の日本での出版に労をとられた皆さん、および翻訳の労をとられた皆さんに感謝の意を表するものである。

一九七七年九月　ブダペスト

著　者

英語版への序言

われわれにとって大変幸運なことに、ハンガリーのすぐれた経済史家であるイヴァーン・T・ベレンド、ジェルジュ・ラーンキのお二人が東欧の経済発展の分析にとりくんでくださった。合衆国においては、ヨーロッパの経済史、とりわけ東ヨーロッパの経済史は、おろそかにされている学問分野である。本書は、細部にこまやかな配慮を払いながらも主要な傾向をみごとにとらえた本である。本書は最初一九六九年にハンガリー語で出版されたが、このたび特別に訂正された形の英語版として出版されることとなった。ハンガリー語版は出版されるとすぐに大評判となった。ベレンド氏とラーンキ氏が協力しあって仕事をしていることは有名であり、両氏は比較的若い歴史家であるにもかかわらず、すでに二〇年以上もいっしょに仕事をしてきているのである。彼らは、ハンガリー語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、英語で数多くの著書や論文を発表しており、その主題は第一次世界大戦前のハンガリーの工業発展から社会主義時代のハンガリーの中央計画経済にまで及んでいる。彼らは親しい友人同士であり、互いに勤勉に協力しあうために、彼らの同僚たちからうらやましがられてさえいる。彼らはお互い同士が最良の指導者であり批判者であるのである。彼らは、非常に率直であり、客観的であり、読みやすい文体を持っているために、ハンガリー本国においては大変に有名であり、称賛を受けている。同時に彼らは、別々にも著作を出している。ベレンド氏はとくに都市問題と経済の計画化に関心をよせ、ラーンキ氏は現代の政治・外交史にかんする学究的な論文をつぎつぎと発表している。しかし、彼らが以上のような仕事のための時間をどのようにして見出しているの

かまったく不思議なくらいである。彼らはともに母校の大学で教え、数人の博士候補を指導し、重要な学術団体の長をつとめ、非常に多くの委員会に参加し、外国とくにオックスフォードやパリや合衆国へしょっちゅう招かれて講演をしているのである。

彼らが著わした本書は、膨大な文献資料に基づいている。当然のことながら、かつてのハプスブルク帝国領にかんする部分は、文献資料の恩恵を他の部分よりも大きく受けている。しかし、バルト海からマケドニアまで、またエルベ川からウクライナまで拡がるあのおそろしく複雑な地域のすべての部分について、これと同じように十分な知識を持つということは、不可能なことである。著者たちは、一九世紀に、ハプスブルク帝国や分割されたポーランドやオスマン帝国のバルカン領――いずれもかつては眠っていたところである――がいかにしだいに蘇生し、つづいて疾走して、つぎつぎと封建制に近い状態から発達した農・工業資本主義に転化したかを、生き生きと描いている。彼らはまた、二〇世紀にはいって急速な経済発展がいかにポーランドやチェコスロヴァキアやオーストリアやハンガリーやルーマニアやユーゴスラヴィアやアルバニアの政治的自己主張を不可避ならしめたかをも説明している。

物語は、統計数字や一見おもしろみのない輸出入や資本蓄積にかんするデータをとおして語られる場合でさえ、劇的なものになっている。なぜならば、すべての新しい工場や銀行や鉄道の背後には、やむをえぬ移民や社会的変転や文化的危機や政治的変動のいたましい物語がしばしば存在するからである。人々は近代化のためにはつねに大きな犠牲を払わねばならなかったのであるが、東欧においてはこの犠牲はとくに重く、そのむくいもまだ完全に受けているわけではないのである。しかし、とくに本書を読んだあとでは、近代化はやってくるべきであったのであり、またそのために努力をする価値があるものであるということに疑いを持つものはだれもいないであろう。しか

もそのうえに、どうやらこの近代化という仕事は過去一世紀半の種々の体制と企業家とによってそれほど下手に遂行されたわけでもなさそうなのである。

読者のうちの専門家のなかには、本書のいくつかの論点には異論をとなえる人もいるであろう。しかし、まさにそのことこそが、著者たちの歓迎することであると確信するしだいである。

コロンビア大学東欧研究所所長・歴史学教授
イシュトヴァーン・デアーク

序文

"Habent sua fata libelli."（「書物はそれ自身の運命を持っている。」）この有名なラテン語の格言は、いかなる本にせよ、その将来についてのみならず、その前身についても妥当する。本書はこれまでにいく分長い前史を持っている。われわれは、一九五〇年代初期の、まだ大学生であったころに、ハンガリーの現代経済史の研究を共同で始めた。われわれは、一九—二〇世紀のハンガリー経済史の研究にほとんど一五年間を費やす間に、つねに東欧経済のモデルに特徴的な諸問題にぶつからねばならなかった。われわれは、とくに、東欧にかんして包括的な比較史的研究がないことを痛感した。西欧にかんしてはそのような文献が豊富に存在することを考えると、とりわけこの感を深くした。

包括的な東欧経済史を書こうという考えは、一九六〇年代の中頃からわれわれの頭の中に浮かび始めた。この考えは、われわれの学問的、個人的経験によって促進された。われわれは、この経験によって、この地域の民族や人民の運命がその経済的発展と切り離しがたいことを、はっきりと知ったのである。

われわれの仕事は、社会科学において、とりわけ経済史の分野において高まりつつある比較史的研究の動向から刺激を受けた。一九六五年にミュンヘンで開かれた第三回国際経済史学会でのペーパーが、第一歩であった。われわれはシェパード・クロウ教授から大いに激励され、教授は学会ののちにわれわれにこれを主題にした本を書くようにすすめてくださった。われわれは、教授がわれわれの意図を励ましてくださったことはもとより、コロンビア

大学出版がこの本を刊行する話を始めてくださったことに対しても、深く感謝をしている。さらに、イシュトヴァーン・デアーク教授も、むつかしい出版の問題について、たえずわれわれを助けてくださった。

この研究は、ハンガリー科学アカデミーとハンガリー教育省の寛大な援助がなかったならば、実現しえなかったであろう。これらの機関からの助成金をえて、われわれは、さまざまな東欧諸国において研究をすることもできたのである。われわれはまた、フォード財団とパリ高等研究学院に対しても大きな感謝をしている。そこからの助成金によってわれわれはアメリカやフランスの図書館の膨大な資料にふれることができ、そうしてわれわれの知識を拡大する機会を持つことができたのである。

この短い序文のなかでは、その著作によって、あるいは多くの場合その助言や批評によってわれわれを助けてくれたハンガリーの同僚たちや、東・西欧の研究者たちの名前をすべて挙げることは不可能である。われわれはこれらの人々すべてにこの場を借りて感謝の意を表したい。

われわれの主たる目的は、この地域の詳細な経済史を国ごとに書きあげることではなくて、一つの東欧経済のモデルを描きあげるために、経済成長の主要な傾向や共通の特徴や特殊な側面を探しあてようとすることであった。

本書は一九六九年の末にハンガリー語で出版された。英語訳の原稿が出されたのは、一九七〇年の中頃であった。しかし、ハンガリー的な英語をアメリカ的な英語に「翻訳」するのにかなり長い時間が必要であった。この仕事をまとめてやってくださったのがルート・ロッカー夫人であり、彼女が原稿を徹底的に推こうしてくださったから、本書が実際に刊行できたのであった。われわれは彼女の貴重な援助に感謝の意を表したい。最後に、われわれは、出版に際していろいろと援助をしてくださったコロンビア大学出版部の副編集長であるバーナード・グロナート氏に感謝の意を表するものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブダペスト
一九七二年三月一五日
イヴァーン・T・ベレンド
ジェルジュ・ラーンキ

ECONOMIC DEVELOPMENT IN EAST-CENTRAL EUROPE IN THE 19TH AND 20TH CENTURIES

by

Iván T. Berend and *György Ránki*

Copyright © 1977 by Columbia University Press
Japanese translation rights arranged with
Columbia University Press, New York through
Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

目　次

日本語版への序言
英語版への序言
序　文
序　論……1
第一部　資本主義経済への移行と産業革命……13
プロローグ……13
第一章　近代的経済発展のための人口上の前提条件……15
第二章　農業の変革と近代的農業発展……29
第三章　近代的信用制度と運輸制度の確立……65
第四章　国家の役割……92
第五章　投資と外国資本……108

第六章　工業発展と経済の近代化……134
第七章　世紀転換期における資本主義発展の新しい傾向……191

第二部　変化と停滞　一九一四――一九四九年……209

第八章　第一次世界大戦の結果
――解体と再建――……209
第九章　再建とその内的矛盾……244
第一〇章　世界経済恐慌の影響と国家の介入政策……292
第一一章　ドイツの経済的膨張
――東欧における「広域経済」――……320
第一二章　両大戦間期の経済成長と構造変化……344
第一三章　ドイツ戦時経済体制のもとで……382
第一四章　戦後復興……407

訳者あとがき……433
文献解題
索引

序　論

今日、欧米の文献においては、「東欧 East-Central Europe」という用語は主として政治的概念として現われ、第二次世界大戦後に出現したヨーロッパの社会主義諸国をまとめて指すものとして用いられている。しかしながら、このカテゴリーは両大戦間期の東欧の概念にのみ一致するものであり、それについては第一次世界大戦後に生じた政治的転換の結果として出された多数の文献が焦点をあててきたとおりである。他方、この用語は、地理的な意味をも持っている。それは大まかに言ってエルベ川からロシアに至り、バルト海から黒海とアドリア海に至る東部ヨーロッパ大陸を含んでいる。(1)

政治的意味での東欧という概念も、地理的意味でのそれも、ともに有効であることは認めるが、本書では、東欧という概念をそのようなものとしては用いていない。確かに、第二次世界大戦後の時期においては、この用語を政治的な意味で用いても問題はなかった。なぜならば、この地域の大部分の国において、同じような社会経済構造と同じような政治制度が樹立されたからである。地理的な解釈も同じように可能である。それは、単に、東欧が一定の自然的・気候的特徴を持つ特定の地域を形成しているからではなく、さらに、ときどきの歴史的状況のもとでこれらの特徴がこの地域の国々の発展に同じような影響を与えたからでもある。とくに指摘すべきことは、この地域がアジアや中東に直接に隣接していることと海から遠いということから影響を受けているということ、しかも同時

に、この地域が世界で最も発達した大陸の有機的一部分であったということである。

だが、われわれの見解によれば、歴史的状況というものが無視されるべきではないばかりか、それのほうがより重要であるといえる。われわれはまさに歴史のなかにこそ、東欧がヨーロッパ大陸の西部の国々のたどった道とはちがった道をたどることとなった決定的要因を見出すのである。これゆえに、東欧はなによりもまず、一つの歴史的な概念であり、第一義的には特有の歴史的・経済的発展路線から出てくる概念なのである。

この進化をあとづける際、われわれは、古代にまでさかのぼったり、民族移動時代やビザンチン帝国に帰することのできる特殊な特徴をさがし求めたりする必要はない。われわれの研究の糸口となる近代経済の登場は、大陸の二つの部分が別々の道を歩むようになった一五世紀から一六世紀に見出すことができる。確かに、その時期以前にも、経済的・社会的発展のレベルの相違は存在したが、多くの類似性が、とくに発展の傾向という点での類似性が、存在したのであった。確かに、大陸東部の国々の発展はしばしば遅れていたが、それでもそれらはフランス人やドイツ人の国々のあとについていく傾向にあった。逆転できないような鋭い分裂が現われたのは、一五世紀から一六世紀にかけてであった。

一六世紀から一八世紀のあいだに、ヨーロッパの西部地域においては、世界貿易のゆっくりとした、しかし重要な転換の結果として、一つの根底的な変化が生じた。そこでは、貿易ルートと商品構成の両方に変化が見られた。これらの変化と関連して、すでにその徴候の見えていた封建的な農業諸条件の解体が進んだ。こうして、一六世紀には、とくにイギリスにおいて、農奴制の漸次的消滅の過程が強まった。狭い局地的市場が国民的市場へ、さらには世界市場へと急速に拡大しはじめた。生産力の急速な増大にともなって、西欧の農業構造はしだいに主として二つの型の変化によって特徴づけられるようになった。一方では、これまでの封建的生産物地代が新しい形態に道を譲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com